

本特集号の編集に当って

三 浦 大 亮*

昨年(1972)の6月号で実務特集を行ったのにひきつづき、今回「コンピュータ利用の実務上の課題」をテーマとして特集をしました。わが国におけるコンピュータ利用が広く行われるようになってから、すでに10年以上の歳月が流れています。その間いろいろな発達・変化に遭遇し、大成功もあれば小さな失敗もあったわけです。しかしこれらは一口に言えば成長期における初歩的な経験であったと言えます。いよいよ成熟期に入ってきた昨今、コンピュータ利用がさらに飛躍的に発展するか、飽和点に達した形になってしまうか、ここが一つの大きな曲角になっているのではないかと感じられます。これまで解決してきた沢山の問題にも増して、新たに発生し解決を迫られている難問課題が山積しつつあるということです。これらの問題は多方面にわたっており、枚挙にいとまがないと言ってよいほどです。しかも一方では全くこれらの問題を意識せず、狭い視野のまま一路邁進している人達もいるように見受けられます。

問題の主要なものの一つは、コンピュータおよびその利用技術がはたして望ましい方向に進められているのかということです。一体いつまで四六時中コンピュータの単純なオペレーションに人間を縛りつけておくのか。一部では自動オペレーションの技術が開発されているようですが、進歩が遅すぎる。プログラミング言語の標準化は、開発された言語のもっぱら後始末として行われていて、一向に実務上の役に立たない。言語の形が良くなっても、効率良く効率の良いプログラムを作る技術や、システム設計の技術はほとんど開発されていない現状のようです。

もう一つの大問題は、どんどん中途半端に養成される情報処理技術者(実は下手なプログラマ)をどのように管理していくか、彼らの将来をどう処遇するかが全く考えられていないことです。目先の開発作業に投入することばかりが優先され、将来一将功成りて万骨枯るということにならないことを祈るばかりです。やはりトップマネジメントを含め、コンピュータ部門はもちろん、他の関連部門の管理者の認識を正鵠を射た

ものにする必要もあるでしょう。

紺屋の白袴という言葉のとおり、システムの合理化を推進すべきコンピュータ部門は、多くの場合、自分自身の仕事およびそのやり方において科学的工夫が行われていない。たとえば、情報処理システムの開発のしかた、その管理のしかた、有効性の把握などにおいてシステムのでない面が多いのです。それに必要な技術が依然として開発されていないとも言えるし、実務家自身がそれを強く意識しないということが原因でもあります。

データ処理が集中化されるに及んで、この安全性の確保がどのようにして行われるかは、これからの大きな課題であり、その解決は焦眉の急です。情報処理技術というにしては多くの側面を持っているので、総合的な検討がなされることが望まれます。

このような問題意識もあって、本特集号が企画されたのですが、あらゆる問題を列挙して論ずることはできませんので、企業におけるコンピュータ利用についてつぎのテーマを中心にして、以下本文に掲載されているような解説をしていただきました。

技術の発展について
要員に関する問題
当面の一般的課題
システムの有効性と評価法
システム開発のアプローチ
データ処理の安全対策
その他

紙面の都合、準備期間などの都合によりいずれも必ずしも十分に解説していただけなかった面もありますが、これを契機にこの方面の検討・論議そして実際的な技術開発への促進が行われれば、本学会としてもその役割の一部を果たしたことになると思います。

昨年以來、実務および実務に近い記事を解説として本誌へ掲載しつつつけていますが、これに対するご意見またはこのような方針に対するアイデアなどがありましたら、本誌編集委員会の方へお伝え下さい。この紙面をお借りしてお願い致します。

* 本会編集委員会委員、東レ(株)システム部